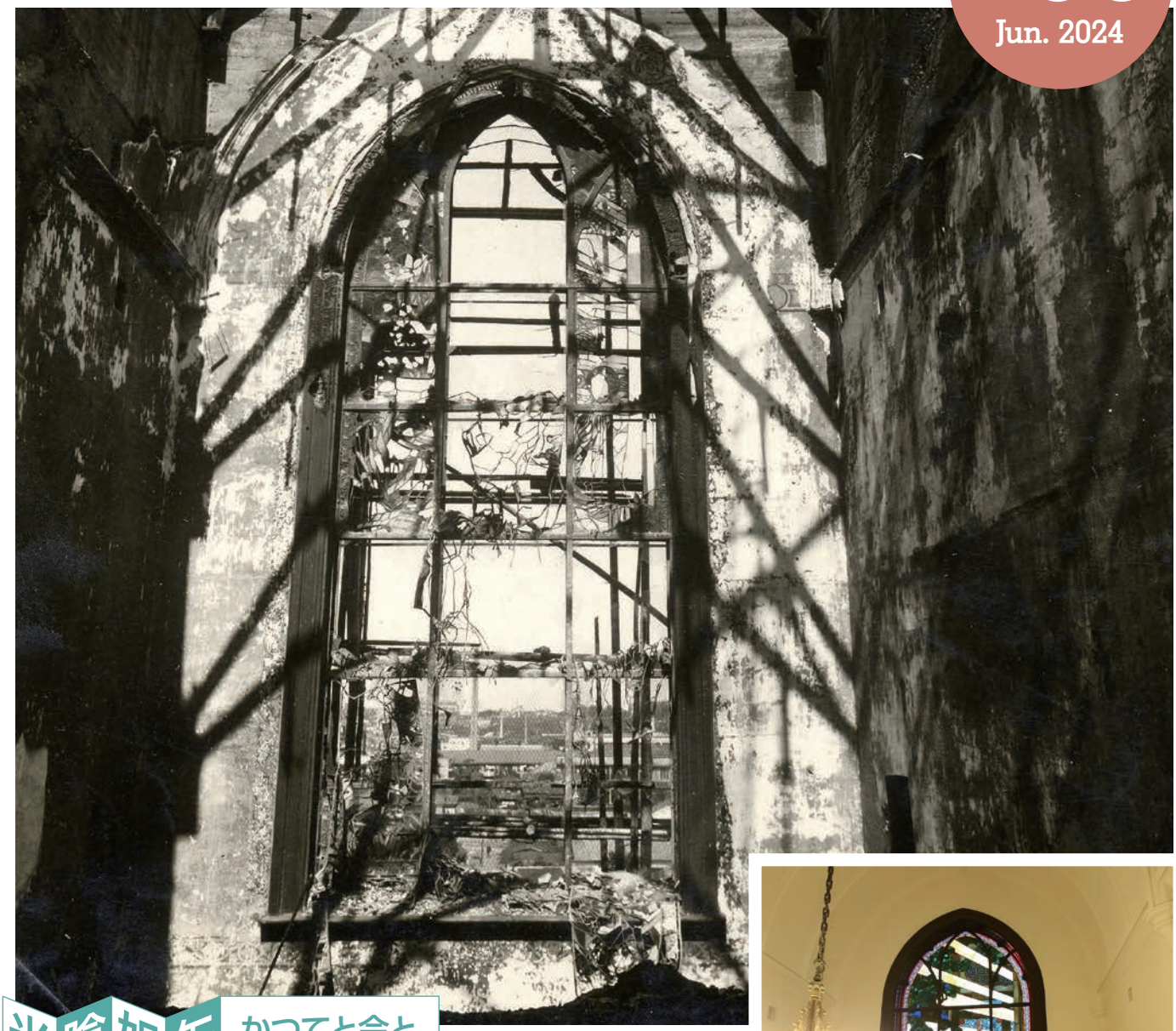
福澤諭吉記念慶應義塾史展示館だより

Tempus

Tempus Fugit —— 時は過ぎゆく

FUKUZAWA YUKICHI MEMORIAL
KEIO HISTORY MUSEUM

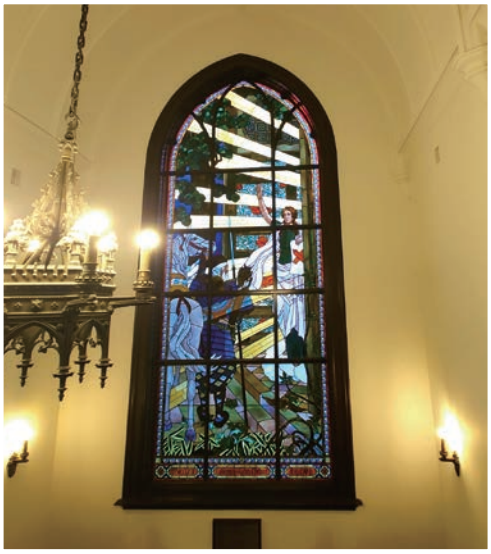
No.06
Jun. 2024



光陰如矢 かつてと今と

焼け落ちた「ペンは剣よりも強し」

三田の慶應義塾図書館に一際存在感を放つ大ステンドグラス。大正4年（1915）、日本におけるステンドグラス制作の草分け、小川三知が手がけ、日本の封建社会と「文明」の出会いを描いたこの大作品は、昭和20年（1945）5月25日夜の東京山手大空襲で焼け落ちました。空襲後間もなくは、もう少し原形を留めていましたが、徐々に崩落が進み、この写真ではすでに大部分がなくなり、裏側に修理の足場が見えています。上部右側には顔が抜けた女神の頭部が残っています。封建思想の打破を訴えた慶應義塾のシンボルが、戦争で焼け落ちたという歴史をどのようにとらえることができるでしょうか。



戦後まもなく撮影された慶應義塾図書館大ステンドグラスの残骸（慶應義塾福澤研究センター蔵）と、現在のほぼ同位置からみた大ステンドグラス（2024年5月）

往時茫々

小森 英明

軍服が支給された瞬間、思わず眼を疑った。これが大日本帝國陸軍の現役兵の正規の服なのか？ あまりにもボロ、あまりにも継ぎはぎだらけ、何よりも古過ぎる。一体何十年前の軍服なのだろうか…。しかし一応きれいに洗濯され、恐らく消毒もされているようだ。

勿論、階級章など一切なし。付いているのはボタンだけ。服に「からだ」を合わせるように学徒一同着用。緊張と不安と初体験に、黙々として誰一人口をきく者もいない。

制服制帽の大学生が一斉に軍服姿に変わった歴史的一瞬である。

イガグリ頭の行列に、下士官が怒鳴るように云った。「いいか、お前達の学生服を、これから梱包して、夫々（それぞれ）の家へ送る。応召前に通知したように、用意した油紙と新聞紙で包め。包んだら紐でよく結んで、住所氏名をしっかり書け。くだらない手紙など絶対に入れるな。お前達は、今日から学生ではない。兵隊なのだ。」一同、又黙々と学生服を折りたたみ梱包に取掛かった。

乞食まがいの軍服を着せられて、別に何の感慨も湧かなかったが、これでわが21年の人生も終わったのだと…聊（いささ）か大袈裟だが…。自分に言い聞かせるような、絶望と諦めに似た淡々とした心境になっていたことだけは、実に鮮明に覚えている。

慣れない手つきで学生服とズボンを一緒にたたみ、その上に制帽を載せると、ふと、突然、泪（なみだ）がどっとこみあげてきた。どうしようもない。文字通り萬感の思いをこめて、俺は今、俺の存在そのもののこの学生服を、俺の短い青春と共に葬り去ろうとしている。黒びかりしたサージ、変色した金ボタン、触っているうちに涙がポトポト服の上に落ちてくる。31番教室のこと、慶早戦のこと、U君のこと、Y君のこと、上野駅まで見送りにきたN子のこと、千人針をくれたS子のこと……次々と走馬燈のように一瞬のうちに浮かんでは消える。隣りを見ると、やはり緊張と悲壮感で手つきも覚束ない。

女々しいとは思ったが、咄嗟に、手帳をひきちぎって、「さようなら、母上殿、感謝してます。」走り書きして学生服の内ポケットに、そっと入れた。下士官の顔を窺いながら。

昭和生れが全人口の8割2分を占めるようになった今日、大学生の制服制帽姿は想像もつかないだろうが、戦前は、誰でも、うしろ姿で学校が識別出来るほど、大学はその制服と制帽に校風と伝統を確然と主張していた。

我々は白線とマントの朴歯（ほおば）に憧れ、とがった角帽に夢を託し、丸い帽子に恋い焦れ、勉強と青春を燃焼しつくしたものだった。つまり学生服こそ、青春のシンボルであり、アイデンティティだったのである。

後日、復員して、この学生服と感激の再会をした。古い座敷の正面に、まぎれもないあの学生服がキチンと吊され、その下に陰膳（かげぜん）が何ごともなかったかのように、そっと据えられていた。妹によると、毎朝毎晩、母は制服を撫でながら「何ごとか呟（つぶや）いていた」という。

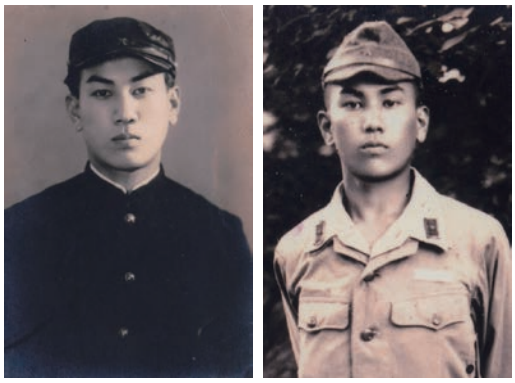
私は絶句した。

この季節になると、ふと頭をよぎる青春の遠く、切ない、暗澹たる思い出の一齣（ひとこま）である。

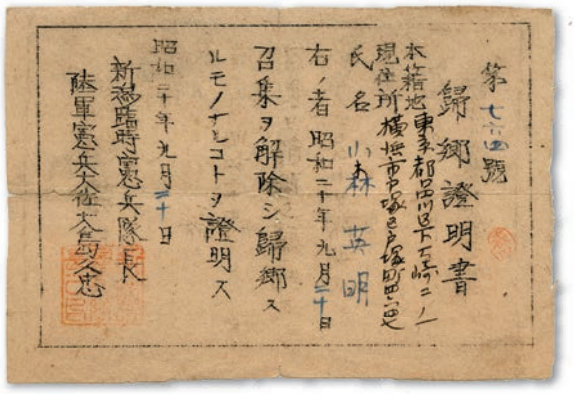
母はいま、90才、元気に庭の草むしりを楽しんでいる。

『日本宣伝クラブ会報』13号（1987年特集号）より転載

小森英明は大正14年（1925）生まれ。昭和24年（1949）経済学部卒。平成30年（2018）没。本館企画展では小森旧蔵の千人針を展示。



慶應と陸軍の制服姿の小森英明



第七四號
歸鄉證明書
本籍地 東京都品川区下大崎二ノ一
現住所 横浜市中区[illegible]
氏名 小森英明
右ノ者 昭和二十年九月二十日
召集ヲ解除シ歸鄉スルモノナルコトヲ證明ス
昭和二十年九月二十日
新潟臨時憲兵隊長
陸軍憲兵大佐 [illegible]

「帰郷証明書」（1945年）

陸軍中野学校1期生の2人の塾員 ―息子たちの回想―

〈亀山六蔵と宮川正之の出会い〉

修)父亀山六蔵は幼稚舎から慶應で、昭和11年(1936)高等部卒。水泳部、ヨット部、JSKS(ラグビー同好会)をやっていたと。晩年まで多趣味な人でした。体格はそんなに良いわけじゃなかったけど、「馬力」はあったらしい。中野に入る前に軍隊で、銃をずっと構えて耐える訓練で、最後まで残ったと聞きました。父が昭和13年(1938)に中野学校(当初は後方勤務要員養成所)1期生18名の内に選ばれたのは、幹部候補生試験で一番優秀だったからしいとは言ってました。

保)父は学究的ではなくて、どちらかといえば遊び好き。優秀ではあるが、型にはまっていないという中野学校の採用方針にたまたま合致したように思えるね。父は同じ慶應の宮川正之さんと騎兵連隊で出会って中野でも一緒で、心酔してまして。後に正之さんの妹と結婚します。

博)父宮川正之は大正2年(1913)大阪生まれで、慶應は昭和9年(1934)経済学部卒。自動車部とヨット部だったみたいです。

修)英語、ドイツ語、ポルトガル語、フランス語、ロシア語もできて。

博)中野学校はそういう教育をしたんでしょう。

修)外国語でいうと、1期生のなかで「学生隊係長」っていう形で2期が入ってきても残った人がいて、父はその一人なんですよ。これは一体何だと父にきいたら珍しく小声で「落第生のことだ」って。英語ができなくて落第したらしい。あと授業で合気道の創始者植芝盛平が来て「触らないのに投げられた、不思議だった」という話はしていた。

保)たしか飛行機の横にいる写真があったね。飛行機の操縦訓練なんかもしてたんだろうね。

博)いろいろ体験させられて、とてもマスターできたとは思えないですよね。

修)何にせよ、中野学校に選ばれたことに対してプライドはあったようです。

〈「諜報員」として〉

修)父は昭和15年(1940)秋にアフガニスタンに赴任しますが、軍人としてではなく、外務省嘱託の身分ですね。参謀総長の閑院宮から直接任命書を渡されたと。諜報については一つだけ、現地でパシュトゥーン族から英国軍の情報を得たという話を聞いたことがあります。あとは雪が降ってスキーをしたとか、公使館に死者が出て鳥葬ではなく火葬にした話。帰国後に上級参謀20人近くに囲まれて「砂漠に戦闘機や爆撃機の離着陸ができるところはあるか」と質問された話も聞きました。

保)アフガンにいたときの公使が勝部俊男さんで、戦後も家族ぐるみで付き合ってました。父は長らく日本アフガニスタン協会の理事長・会長も務め、中村哲医師のペシャワール会に最後まで寄付をしていましたね。

博)うちの父は武官として2年くらいドイツにいた後、ポルトガルに行きました。遺品に溶けかけたフィルムが残っていたのですが、それを見ると、本当に戦争やってんの?って感じで。お酒飲んでたり、闘牛を撮っていたり。大統領の姪と付き合っていたとかで写真がありました。

保)絶対モテたと思うね。カモフラージュってこともあるのかな。もっとも、父は「スパイ」っていう言葉にはすごい嫌な顔をしていた。ドンパチするイメージを嫌だと。参謀本部に行くときに軍刀を忘れた話をうれしそうにしていたのも思い出します。門衛から「少佐殿、軍刀は」と言われ、とっさに「後からくる」と切り返したと。ただ中野の二俣分校出身の小野田さんがフィリピンで投降したとき、自分が学んだ本校とゲリラ戦要員養成の二俣分校とは全く違うんだということは言っていました。

1期生として訓練中の亀山(左)と宮川(亀山保氏提供)

〈戦後の父たち〉

博)戦後、父とは戦争の話題は絶対にしませんでしたし、ちょっと父に反抗していたら、台湾出張中に54歳で急死してしまいました。身内でありながら周りの方から得る情報しかなかったんですよ。母も何も知らない。

保)こちらの父もおしゃべりな割に肝心なことは喋っていない。中野で受けた教育が大きいのかな。

修)戦争のことはストレートに質問しても駄目。一般論として「平和は大事だ」みたいなことだけで。それで司馬遼太郎の話から明石元二郎や秋山好古の話で吹っかけてみても、駄目だった。今から思えば、小さい話に押し込まれたんだなと。「中野では敬礼しちゃいけない」とか、当たり障りない話だけはしてたから、少し頭使ってたなと(笑)。

保)主流は日本的な軍人養成の時代に、敢えて軍人らしくない者を育てようとした不思議なエアポケット的なところに、本来軍人タイプではない父とか、おじさん(宮川)が足を突っ込んでしまったという気がするんです。正之おじさんはどこに出しても優秀な人材だったと思うよ。ただ父は最後まで「遊び人」で、晩年も急に葬式が格好いいという理由でカトリックの洗礼を受けて(笑)。平成18年(2006)に91歳で亡くなりました。ある意味、典型的な慶應ボーイだったのかも知れません。

語り手:亀山六蔵長男・保氏、次男・修氏、宮川正之長男・博行氏
聞き手:慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所都倉武之研究会ゼミ生
2017年7月18日に行った聞き取りの抜粋。全文は三田祭研究冊子『陸軍中野学校をめぐる人々とメディア表象』(慶應義塾図書館ほか蔵)に収録。要約作成山中惇敏。

千客万来

記念講演会「慶應義塾日吉キャンパスをめぐって」

かつて塾高勤務であった頃、当初より抱いていた、「塾高はなぜ、このように杜撰な建物なのだろう?」という自分の中のクエスチョンに対して、いくつもの回答が得られました。人をひきつける魅力を感じさせる、建造物の成り立ち、歴史、せめぎ合い、信念、ロマン、時代の流れにのまれない強い心、誇り、様々な背景の波を乗り越えてきたことを知り、大変興味深く楽しかったです。まだまだ"ナゾ解き"が残っている、第一校舎にこれからも注目していきたいです。／未来に生きる若い学生にどのように生きてもらいたいか、そのような理念が反映されるものだと思いました。／合理主義、機械主義、利便性だけを追及する時代において、その時代を反映する建物という見方でこれから建物をみてみたいと思います。／私は高校のグランド前の家で育ち、今も住んでいます。記憶に残る校舎は、まだ戦中の残りで、黒いペンキ塗りでした。日吉キャンパス、特に高校エリアは遊び場でした。父も学んだ校舎が今でも多くの若い学生さんが学んでいるのは、本当にうれしい事です。／今回のように1つの建物を取り上げ、どのような経緯で現在の設計になったのかを考えるのは大変おもしろく感じました。／私は第一校舎が好きでなぜかと言うとやはり伝統的で歴史をもって、そこに建ち続けている。円柱にしても、窓にしても建築家の心意気を感じます。／装飾について。建築は単なる入れものではなくて、時代や設計する人の色々な思いがつまっていることがわかった。／歴史の波に翻弄されながらも、根底のところは変わらない慶應義塾の理念もこの建物の歴史を通じて感じました。／私としては、網戸武夫という人物の建築に対する考え方と、それに対する批判との第1校舎を巡る衝突・せめぎ合いが大変興味深かった。各人がどのような思想・主義のもとにそれを具体的なデザインに落とし込んでいたのかを、実際の写真や設計図・構想図、あるいは実物の校舎を見ながら学ぶことができ、理解が深まった。

日吉キャンパス建築特別見学会

慶應義塾の建築群は様々な様式が混在し興味が尽きません。現役の学舎としてできるだけ使用して行こうという姿勢も素晴らしいです。／今後も定期的にこうした見学会を開催いただくことで、ファンが増えていき、また学術的な交流もできるのではないかと思います。是非ご検討いただけますと幸いです。／キャンパス全体は広大で道幅も広く、記念館前や食堂前の広場、そして内部を見学させて頂いた第一校舎のエントランス、階段、廊下、踊り場なども非常にゆとりがあり、こうした環境もまた慶應義塾の校風や塾生の気質にも影響しているように感じました。／これらは言わば、学校法人としての慶應義塾の企業努力の賜物ですが、こうした、傍から見ると余裕のあるスマートな校風や気質は、ひと頃、国立や私立バンカラ風大学との比較において、日本人の判官びいきややっかみ根性も相まみえ、蔑まれていた感もあったかと思料します。／建築の造形美を単に愛でるだけでなく、学園都市構想や設計者と施主との擦り合わせ、時代背景と機能の変化など、講演会と見学会、先生方の書籍を通じて知識を蓄積する事ができました。寄宿舎のローマ風呂が公開される日が来ましたら是非足を運びたく存じます。／明るいキャンパスを守っていけるかどうかは現在そして未来に続く課題であり、それは大学だけではなく地域や社会ともつながっていると実感しました。

企画展示室の今後の予定

2024年度秋季企画展
カレッジソングと藤山一郎(仮)
2024年10月17日(木)～12月14日(土)

慶應義塾福澤研究センター
新収資料展2025
2025年1月10日(金)～2月8日(土)

慶應義塾史展示館の図録

『福澤諭吉記念慶應義塾史展示館開館記念図録』
A4判　24頁
2021年7月4日発行
800円

『慶応四年五月十五日 ―福澤諭吉、ウェーランド経済書講述の日』
A4判　76頁
2021年10月9日発行
1200円

「福澤諭吉と『非暴力』 ―学問のすゝめ150年―」
A4版　68頁
2022年11月30日発行
1100円

「曾禰中條建築事務所と慶應義塾」
A4版　176項
2023年11月30日発行
2800円

当館常設展示室受付、カフェ八角塔、三田インフォメーションプラザのほか、
慶應義塾公式グッズサイト (https://keiogoods.jp/) からもお求めいただけます。

基本情報

開館年月日　2021年7月5日
空間デザイン　槇総合計画事務所
展示設計製作　株式会社トータルメディア開発研究所
床面積　常設展示室:280.44㎡　企画展示室:60.99㎡

スタッフ一覧

館長　平野　隆
副館長　都倉　武之
所員　西澤　直子、阿久澤　武史(兼運営委員)
所員　クラシゲ, ジェフリー ヨシオ、小山　太輝、齋藤　秀彦、末木　孝典、山内　慶太、結城　大佑
専門員　横山　寛
事務局　福澤研究センター　兼務

来館者数

2023/10	2023/11	2023/12	2024/1	2024/2	2024/3	2024/4
3462名	17775名	3029名	2487名	2253名	3260名	2447名

※2023/11は、三田祭期間中に4日間開館

諸記録

10月21日	企画展開催記念講演会
10月24日	企画者によるギャラリートーク　1回目
11月 2日	2023年度　第2回運営委員会
11月 4日	日吉キャンパス建築特別見学会
11月10日	企画者によるギャラリートーク　2回目
1月15日	2023年度　第2回所員会議
1月10日～2月10日	慶應義塾福澤研究センター新収資料展2024
3月 5日	2023年度　第3回運営委員会
3月5日～3月28日	慶應義塾大学文学部古文書室2023年度企画展「古文書にみる病と薬」

福澤諭吉記念慶應義塾史展示館だより
Tempus (テンプス) No.06

発行日　2024年6月18日(年2回発行)　印刷　(有)梅沢印刷所
編集・発行　福澤諭吉記念慶應義塾史展示館
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45　電話 03-5427-1200　https://history.keio.ac.jp/

各種SNSはこちら　@keiohistory　@keiohistory　@keio_history